ほたる館開館5周年記念

座談会

——出席者　山岡　誠　永尾　忠生　中村　光男　上田　直子

——コーディネーター　田中　文彦

平成14年4月24日、北九州市のホタル保護発祥の地、小倉北区熊谷に「北九州市ほたる館」が誕生しました。あれから5年。水辺を愛する人々の笑顔を見つめ続けるほたる館に、思いを寄せる方々にお集まりいただき、開館までの苦労話や今後のほたる館のありかたなど、それぞれの視点で熱く語っていただきました。

宿直の晩の、あのホタルの美しさが、ずっと頭から離れません。

田中　今日は、ほたる館開館5周年を記念いたしまして、ほたる館をつくる構想の段階から携わっていただいた皆さん方にお集まりいただいて、ほたる館についての皆さんのさまざまな思いをお話しいただきたいと思っております。

ホタルと関わるようになったきっかけと自己紹介も兼ねて、おひとりずつお話をいただければと思います。

中村　私のホタルとのきっかけは、昭和36年ですが、小倉南区の菅生中学で教員をしていたころに、その当時まだ宿直の制度がありまして、菅生中学はちょうど合馬川の横にありますので、合馬川で発生したゲンジボタルやヘイケボタルが学校の運動場にもたくさん飛び回っていました。川まで行くと随分たくさんのホタルがいましたから、宿直の晩はいつまでも川べりのホタルを見ていました。

他の学校に転勤になっても、その当時のホタルのあの美しさがずっと頭から離れずこびり付いていました。そのころ、強い農薬などが使われ始め、ホタルが激減していることが新聞報道されていたのを覚えています。

私が飼育を本格的に始めたのは、昭和45年、1970年です。始めてちょうど2年目に飼育のゲンジボタルの第1号が出ました。それから後に富野中学、菅生中学と転勤になりましたが、そこの中学で蛍研究クラブというのをつくりまして、生徒と一緒にクラブ活動でやっていました。昭和54年、今から28年前になりますが、小熊野川に100匹の幼虫を放流して翌年20匹の成虫が飛びました。それから2、3年は、菅生中学の蛍研究部の生徒が育てたホタルを小熊野川に放流に行っています。

ほかに、ホタルのことに関わった行事としては、平成7年に発足した北九州ほたるの会、平成10年の全国ホタル研究会北九州大会です。また、平成14年に市と共催で始めた日韓ホタルシンポジウム、平成18年からの国際ほたるシンポジウムにも関わってきました。

私は今まで地域の中で一緒に活動をしたことは余りないわけですが、あえて言うならば、小熊野川地域の方が盛んに活動を始めたころに、一緒に関わりました。

田中　ありがとうございました。それでは、山岡先生お願いします。

山岡　中村先生が昭和36年からホタルの繁殖を学生と一緒にやっておられたということは、私は全く知りませんでした。

昭和40年ごろ、農薬を空から撒いたりして、全国的に昆虫が激減してしまったんですね。場所によっては昆虫のある種類はもう絶滅するんじゃないかというようなこともあったわけです。

山岡　誠 氏
板橋区ホタル飼育施設顧問
北九州ほたるの会初代会長
元小倉高校教諭
元九州女子大学・九州女子短期大学教授
「北九州ほたる館計画策定委員会」委員長

私は、当時小倉高校の教員をしていまして、生物部員に昆虫採集をやめて昆虫の飼育を勧めました。「蛍雪の功」ということから、ホタルの飼育を始めることにしました。その当時、ホタルの飼育の本というのはほとんどなかったですね。頼りになったのは、ホタル研究者の南喜市郎さん、あの人の本が唯一の頼りで、それを見ながら飼育を始めました。

忘れもしません、昭和41年の5月20日のことです。部室の小さなかごの中でヘイケボタルの成虫が4匹発生したんです。西日本新聞にも掲載され、みんな大変喜びました。あのときの感激が忘れられず、現在までホタルと共に生きてきました。中村先生とホタルのことで知り合ったのは、昭和50年前後だと思います。

市の教育委員会から昭和54年に、山口市の一の坂川のホタル護岸の視察要請があって、中村先生といっしょに行きました。夜、川に行くとそれはもう三千匹以上でしょうか、随分たくさんのホタルが飛んでいましたね。山口県の河川課で、一の坂川のホタル護岸の設計図の写しをもらって帰りました。

中村先生がゲンジボタルの幼虫をたくさん小倉高校に持ってこられて、小倉高校の温度調節できる飼育器に入れて飼育を始めました。中村先生の本当に熱心な飼育によって、200匹くらい成長したなかで、大きく成長した100匹を選んで12月に、小熊野川に放流したんですよね。

次の年、5月の終わりぐらいです。小熊野川でホタルが飛んだと新聞に載ったんですね。それを見た中村先生が公民館にすぐ飛んで行って、実はあれはこちらで放流した幼虫だという話をしました。それから北九州でホタルの飼育をみんながやり始めたというわけです。

小熊野川の放流したところの自治会に、上野さんという市会議員の方がいらして、早速、市議会でホタルのための川の護岸を提案したんです。それが認められて、北九州市内にホタル護岸の川ができるということになりました。運が良かったんですね。

それともう一つは、山口市の一の坂川のホタル護岸の視察の後、私なりに簡単にホタル護岸の図面を書き、当時の谷市長さんにその提案書をお渡しできたことも幸いしたんだと思います。

中村　光男 氏
北九州ほたるの会会長
全国ほたる研究会副会長
「北九州ほたる館計画策定委員会」委員
元中学校美術教諭

北九州博覧祭が、ほたる館をさらに充実させました。

上田 私のホタルとの関わりは、中村先生や山岡先生みたいに長い歴史はないんです。

人事異動で平成13年にほたる係長になりまして、そこからが始まりです。最初はヘイケボタルとゲンジボタルの区別もつきませんでした。（笑）

私がほたる係長になった平成13年というのは、ほたる館をいよいよつくり始めたころで、最初に言われたのは、ほたる館を今年度中に全部完成させて、ホタルが飛ぶシーズンの前、つまり来年4月にオープンすることでした。

山岡先生や中村先生が入っていらっしゃったほたる館の計画策定委員会で、基本方針やコンセプト、またどんなものを展示するかというのは一応決まっていましたが、それを具体的に形にしなければなりませんでした。もう目の前が真っ暗になりましたね。

最初のほたる館の構想は、市民活動の拠点で、環境保全のコンセプトの中心となる施設ということだったんです。ほたる館に人を集めていろんな感動を与えようと思ったら、やはり生きているホタル、それから動くものを展示しないと長く続かないということでした。あのとき一番展示で苦労したのは、基本計画の一つの大きなシンボルになっていましたホタルの生態がわかる大型水槽ですね。平成13年の北九州博覧祭のときに講演に来ていただいた、東京の板橋区ホタル飼育施設の阿部さんのご協力を得て、横が4メートル、幅が1メートルという大きな水槽ができました。そういう大きさの生態系水槽は日本全国どこにもなく、今でも日本一の大きさだと聞いています。

それからもう一つは、ホタルのイルミネーションですね、ホタルロボットです。これも阿部さんが、茨城大学の稲垣先生と一緒に研究されていて、ちょうど博覧祭に出ていました。博覧祭があったのが、本当に幸いしたんですね。ホタルが見られない時期でも、同じような光り方をここで見ることができる、そんな施設ができたわけです。この博覧祭からもらった二つのアイデアが、今のほたる館をさらに充実させた点ですね。

山岡 私は現在、家庭の事情で東京に転居し、板橋区のホタル飼育施設で顧問をしています。阿部さんから、北九州市ほたる館の大型水槽に関わった話しはいろいろ聞いています。

上田 先生が転居されたところに、たまたまホタル飼育施設があったなんて、運命を感じますよね。

山岡 北九州のほたる館で水槽の製作を頼まれて、阿部さんも張り切って日本一の大きな4メートルのガラスの水槽をつくりました。しかし千葉県からそれを北九州まで運ぶのが大変だったそうです。2番目は下関市の豊田ホタルの里ミュージアムのもので、4メートル弱とちょっと小さいようです。

ホタルの光でアルファー波がいっぱい。だから心が癒されるんです。

山岡 もう一つのホタルロボット、これは阿部さんがホタルの光が人の心を癒すということを知ったからです。

板橋のホタル飼育施設の近くに病院がありましてね、その病院はアルコール中毒とかシンナー中毒の患者さんが中心で、何人かを板橋のホタル飼育施設に連れてきてホタルを見せているんですよね。館内を見学して帰るときの患者さんの穏やかな表情を見て、ホタルの光には何かあるぞということがきっかけらしいですね。

ホタルの光をじっと見て脳波を調べると、アルファー波がたくさん出てくるんだそうですね。そういうものを基にして、ホタルの光と色が同じものをつくろうということになったそうです。

茨城大学工学部の稲垣先生の協力を得て制作に成功したんですね。随分難しいらしいですね、ホタルの光は色や点滅の仕方が単純じゃないから。とにかく苦心惨たんされたようですね。

ホタルに詳しくて熱意のある人を館長に!……適任者がいました。

田中 それでは永尾館長、ホタルとの関わりをお願いします。

永尾 私は山間部で生れ育ったもので、生まれたときから周りにホタルがいっぱいいたんですね。

実際にホタルと正式に関わり始めたのは、退職する2年前のちょうど1998年ですかね、高見中学の校長時代です。当時、槻田地区でほたる祭りがあっていまして、生徒指導の名目で見に行ったんですね。そしたら、ホタルが一匹しか飛んでいないんですよ。それを見て子どもたちが「わぁホタルが飛んでる」って走り回って喜んでいるわけですよ。

山岡 貴重品だったんですね。

永尾 ホタルが飛ぶということは、こんなもんじゃないんだよということを子どもたちに教えてあげたくて、それで、少しホタルを増やしてみようと思いました。たまたまうちの倉庫が空いていたので、空調を入れて温度管理ができるようにして、見よう見まねで雌ホタルをつかまえて、幼虫を飼育して、放流しました。

それから退職した後も、家で飼育している幼虫を市内の中学校の理科の先生たちに分けてあげていたところ、それがたまたま新聞に出たんです。これが、ほたる館の館長のお誘いをいただくきっかけになりました。

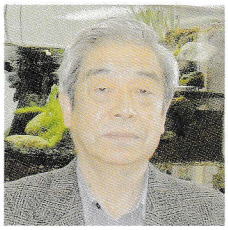
上田 ほたる館構想の大きな目玉だった、自分で自分のホタルを飼育する「マイボタル」というのが、結局最後まで問題になりました。飼育の方法や楽しみ方を教える、病気になったときの手入れの仕方を教える、それから参加者を募るなど、ハードでなくてソフトの面ですね。そこのところを一体誰が指導できるんだろうと。ホタルの飼育に詳しい館長さんがぜひ欲しい、と当時そういうことが1年にわたって大きな課題として残りました。

そんなとき、永尾館長の噂が耳に入り、ぜひほたる館の館長にという話になったんです。

ほたる館が、小熊野川のそばにあるというのに意味があるんです。

田中 小熊野川がホタル保護活動の発祥の拠点だということで、ここにほたる館を建てることになった経緯をお聞かせいただけますか。

山岡 私は、平成10年の全国ホタル研究会北九州大会の後に、ホタルの研修センターが必要だなということで、当時の末吉市長に



永尾　忠生 氏
北九州市ほたる館館長
北九州ほたるの会副会長
元中学校校長

文書を送ったことがあります。大会で全国のホタルに関する資料がいっぱい集まって、その資料をみんなで見ることができる場所、みんながホタルについて相談できる場所が必要だと思ったんです。

上田 当時、小熊野川の地元の方から、ホタルの資料館を建ててほしいと議会に陳情書が出ていたようです。

山岡 そういう話が出ていたんですね。私の方で市長さんに要望をしているのと同時に、地元からもそういう話が出ていて、それが合わさったんですね。

田中 やはり先生方や地元のみなさんの熱い思いに応えて、行政が動いたんですね。そしてそこに、たまたま統廃合により使わなくなった小熊野保育所が活用できないか、という話になったんですね。

山岡 ほたる館計画策定委員会ができ、委員長になって委員のみなさんと議論し、ほたる館を市民による水辺環境保全活動や地域コミュニティ活動の拠点にするというコンセプトにたどり着いたわけです。

田中 そういう基本構想を受けて、上田さんからも話が出ましたように、それを具現化していく過程で、いろいろとご苦労があったと思いますが。

上田 初期の構想としては、会合の場所であり、実験もできる、また資料を保管し活用してもらう場所ということがありました。しかし、ホタルの保護活動をしている方のメンバーが余り広がらなくて、だんだん高齢化しているという問題がありました。

活動をもっと広く市民の人に知ってもらって、誰でも参加しやすいものにしていきたい、そういう思いが行政の方から少し加わっていったんですね。

一般の人が、気軽にちょっと行ってみて、ホタルだけでなく他の水辺にすむいろんな生き物について、もっと知りたいという気持ちになれるというか、飼育に参加するというか、そういうものが加わって、大きなコンセプトに広がっていったんですね。

田中 そのコンセプトを生かしながら、それについて、たとえば北九州

上田　直子 氏

北九州市立大学大学院
国際環境工学研究科准教授

元北九州市建設局水環境課
ほたる係長(H13～16年度)

ほたるの会と行政の方とで、いろんな議論があったようですが、どういうお話しがございましたでしょうか。

中村 北九州ほたるの会と行政とがうまくかみ合わないようなことが一時ありましたね、特に運営の面で。でもそれはそれなりに良かったんじゃないでしょうか、今ではそれこそ仲良くやってますしね。

山岡 産みの苦労といいますか、お互い色々な思いがあって、どうしても意見の対立がありますよね。

中村 今の場所にほたる館ができたというのは、私個人で考えてみますとね、小熊野川は、やっぱり北九州でのホタル復活の第1号の川ですよね。ここ小熊野川にホタルが出た翌年ぐらいから、槻田地区の発展期成会や高槻小学校、それから鞘ケ谷小学校というふうに、もう毎年のように次々と広まっていったわけですよね。

そういう意味でも、やっぱりほたる館は、記念碑的な建物だと思いますよ。他県からの来館もありますが、皆さんに説明しても何か納得のいく説明ができますね。そういう意味でもやっぱり価値があるような気がします。

田中 上田さん、いわゆるハードの整備について随分とご苦労があった様に思いますが、何か大変思いに残っているようなご苦労はございますか。

上田 ほたる館は、館の外にせせらぎ水路と実験用の田んぼ型ビオトープがあるんですね。あれがまたなかなか難しいものがありました。

せせらぎ水路は、川の水をポンプアップして上流に持ってきて、それを流してまた元の川に戻すというものです。子どもたちがあそこの公園に来て、ホタルに親しむ、水辺に親しむことができるというコンセプトがあったので、それを実現するための場所として整備しました。

最初は工事のために、小さい泥がいっぱい溜まってしまったんですよね。でもゲンジボタルを育てるためには、中の石はかなり粗いものがいいということで、みんなで水を何度も何度も流して、泥を洗い流しました。

それから、もう一つの田んぼ型ビオトープは、市内の田んぼが減ってヘイケボタルも少なくなっているので大事にしようと、実験的に水田を作ろうとしたんですね。開館まで時間がなく、田んぼの土を小倉南区のほうから持ってきて、稲も早く育つ苗をいただいて、職員総動員で田植えをしました。

開館のときにホタルの幼虫を放流するからと、それらを館内の整備もしながら開館前1か月の間にやらなければならず、もうスーパーマンになったような気持ちでした。（笑）

子どもたちの、「光っているホタルが見たい!」の声に応えたかったんです。

田中 そういうご苦労があって、何とか4月24日に開館したわけですが、初代の館長として、マイボタルも関連しながらその辺のいきさつ、苦労話をお聞かせいただけますか。

永尾 私が館長に就任したときは、ほたる館の形がほとんどできていましたので、いろんな経緯を全く知らないままに飛び込んだんですね。

最初は小さい容器で飼育して、とにかくホタルの幼虫が、いつ来ても見られるようにまずしようというところから始まりました。

成虫は、昼間は明るいので葉っぱの裏にじっととまっているだけで、子どもたちに見せても、「光ってるホタルはおらんの?」といつも聞かれていました。

それから多摩動物公園を参考にして、ヘイケボタルの温度管理をしたら、1月に真冬第1号の成虫が生まれたんですね。真冬ですからどこか暖かい部屋がいいだろうと、2階のホタルロボットの前に置いたら、光に反応し始めたんです。

最初の年は、ほたる館も私も技術はそんなになかったので、北九州市内のいろんな人からのノウハウを集めて皆さんに紹介するということしかできなかったですね。成虫が長生きするためには蜂蜜か砂糖水がいいとか、産卵場所をスポンジからガーゼに変えたりとか、手探り状態で始めました。

2年目からは、冬でもヘイケボタルが産まれたものですから、冬に来館しても、産卵する様子や卵からふ化した幼虫、昼間に光って飛んでいる成虫まで、一年中いつ来られても見てもらえることができるようになったわけですね。

また、マイボタルはよその市から来られる方たちにも非常に関心が高いですね。ホタルの保護活動をしている人たちには年長者が多いから、小さなホタル博士を育てるためには、家族で関わってもらいたいんですよね。

最初は、産卵させる親ボタルを採るのに、地元のひとに誤解されてトラブルになったこともありました。このごろは、いろんなホタルの愛護団体のリーダーの方たちに協力してもらえるようになってきたので、うまくいくようになりました。

田中 一年中昼間でも光るホタルを見ることができることと、自分で自分のホタルを育てるマイボタル制度は、今ではほたる館の目玉事業ですからね。

今後の課題、それは館の運営には欠かせない、ほたる館サポーター

田中 ほたる館は、市民ボランティアのサポーターさんにお手伝いしてもらって、運営が成り立っているようなものですが、中村会長、サポーターの観点から、ご苦労された点とかエピソードがございますか。

中村 なかなかサポーターが育ちませんね。遠方からのサポーターというのは非常に難しいと思いますね。だから、ほたる館を中心にして割合近隣の人に協力してもらうような方法も一つだと思いますね。

田中 これについては、行政と指定管理者と一緒に取り組んでいかないといけない課題だと思いますね。サポーターを含めて、後継者づくりというのは、非常に大きな課題になっていますね。

永尾 今はサポーターと北九州ほたるの会の皆さんに相当協力いただいているんで、非常に助かっています。

田中　文彦 氏
北九州市建設局下水道河川部
水環境課長

中村　他のサポーターとの接触があまりないので、サポーター登録している人たちが一度集まって、いろいろ情報交換するようなことができれば、お互いに少しずつ繋がっていくかもしれませんよね。

永尾　夏休みやウィークデーに小学校や幼稚園の子どもさんが団体で見学に来られたときの、臨時職員の方とサポーターの方の運用を工夫していく。それと、やっぱり予算面の問題もありますね。それから、新しくサポーターになった人にホタルのことをどう伝えるか、お互いの勉強会の時間をどこかでセッティングする、そういうことが必要になるかなと思っています。

田中　開館5周年、5年間やってきてご苦労もありますし、また課題も少しわかってきました。今後、原点を踏まえつつ、どのようになっていけば良いのか、皆さん方のご意見を聞いて、我々としても今後の館の運営の参考にしたいと思います。

中村　市内にいろいろな施設がありますが、ほたる館は生き物を扱う特殊な施設だと思います。一日だって気が抜けませんし、もう少し職員に余裕があれば、館長も安定してよりよい仕事ができると思いますね。

山岡　私が今いる板橋区のホタル飼育施設では、ホタルが出る6月～8月に、大学生が研修に来るんです。多いときは30人ぐらい、いくつかの班に分かれてね。その大学生たちは、研修の単位をもらう人もいるし、好きで来ている人もいる。

来館者一人ひとりに案内させています。これは結構うまくいっていましてね。館内が賑っています。また聞かせて下さいと何度も来る人もありますしね。

田中　上田さん、最後の締めも兼ねて、今後のほたる館はどのように運営したらいいでしょうか。

上田　サポーターの育成がカギとなるでしょうね。ほたる館でやっているホタルと水辺環境を学ぶ市民講座「ほたる塾」は、当初サポーターの育成を目的としたカリキュラムでした。その中から熱心な人を拾い上げていって、ほたる館のサポーターとか応援者にしていくという予定でしたが、サポーターに成長していく方はあまりいませんでした。

結局、最後まで館長をバックアップして応援してくださったのは、元から北九州のホタルに関心が深かった中村先生を始めとする、北九州ほたるの会のメンバーの方々です。今韓国との交流も盛んですが、それも熱心に応援してくださるのは、やっぱりほたるの会。このほたるの会のメンバーの方々がいなかったら、今のほたる館はあり得ないですね。

中村　今、ほたる塾でサポーターに登録している人が2人いますよ。

上田　そうですか。それは大きな成果ですね。

それと、今ほたる塾を運営してもらっているコーディネーターさんがいらっしゃいますが、ああいう方々に、ホタルに関する知識だけではなくて、仲間を集める活動や、いかに広げていくかということについてもお知恵を拝借することができればいいと思います。市役所の職員の中にも、環境に興味のある方もいらっしゃるでしょうから、声を掛けてそういう活動の参加を促してみたらどうでしょうか。

私も、北九州市立大学の学生の授業の中に入れて、単位が取れるところまでいけるかどうかわかりませんが、見学に行くとか、案内をするとか、活動を勧める、そんなところから始めていきたいと思います。

田中　ありがとうございました。一番の考え方は、ほたる館の基本構想である、市民による水辺環境保全活動、地域コミュニティ活動の拠点なんですね。今皆さんがおっしゃったように、市民が集まるような仕組みづくりが、当初からのコンセプトでもありますし、これを守って、さらに広げていくことが、まさにほたる館の今後の大きな課題だということが見えてきました。

今日は本当にありがとうございました。